

フィンランド語

松村 一登

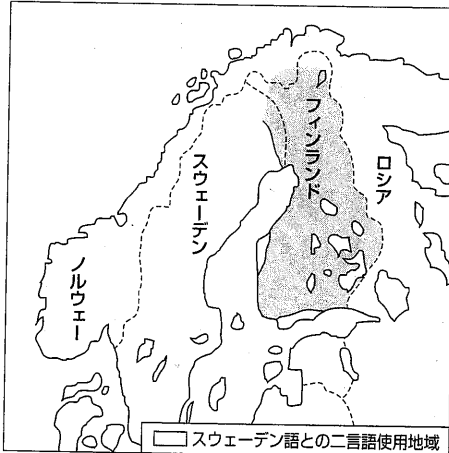
1 系統・分布・方言・名称

ウラル語族フィン・ウゴル語派バルト・フィン諸語の1つであるフィンランド語(「フィン語」とも呼ばれる)は、同じバルト・フィン諸語のエストニア語とは姉妹語の関係にあり、互によく似ている。また、フィン・ウゴル語派ウゴル諸語に属するハンガリー語とは遠い親戚の関係にある。

フィンランド語はフィンランドの公用語の1つで、話者人口は世界中で500万人程度。フィンランドの人

口510万人の93.5%(477万人)が母語とする(1994)。このほか、フィンランド語の話者がいる地域は、スウェーデン(30万人)、ロシア(7~8万人)、北アメリカ(7~8万人)などである。

フィンランドでは、フィンランド語のほかに、スウェーデン語とサーミ語(ラップ語)が「内国語(kotimaiset kielet)」と認定されている。32万人(フィンランドの人口の6.3%程度)の話者のいるスウェーデン語も、フィンランド語と並んで、フィンランドのもう1つの公用語となっている。フィンランド国内のサーミ語の話者は2,000人程度で、サーミ人の多いフィンランド北部(ラップランド地方)の一部地域では、サーミ語を地域公用語として定めているほか、一部の授業をサーミ語で行なう学校もある。



フィンランド語の話されている地域は、現在のフィンランド共和国の領土とほぼ一致する。ただし、オーランド島(Åland, フィンランド語名 Ahvenanmaa)とその周辺の島々、および、フィンランド中部のボスニア湾岸地方は、スウェーデン語単用地域となっており、これらの地域の周辺、および、南部のフィンランド湾岸地方は、フィンランド語とスウェーデン語の併用地域である。なお、ロシアのカレリア地方のラドガ湖の北岸、および、同湖とフィンランド湾に挟まれたカレリア地峡地帯には、第2次世界大戦前まで、かなりの数のフィンランド語系住民が住んでいたが、1944年にこれらの地域がソ連邦(現ロシア)に併合されたのに伴い、ほとんどがフィンランド本土へ移住した。サーミ語を母語とするサーミ人の多くは、フィンランド北部、ノルウェーとの国境地帯に住んでいる。

フィンランド語の方言は、普通、大きく西フィンランド諸方言と東フィンランド諸方言に二分される。西の方言の代表は、フィンランド南西部のハメ地方(Häme)の方言、東の方言の代表は、フィンランド東部のサボ地方(Savo)の方言である。

フィンランド語の共通語(yleiskieli)は、東西両方言群の要素を取り込んで成立したため、現在ではとくにどれか特定の方言に基づいていると見なすことが難しくなっている。また、最近では、マスコミなどを通して、首都ヘルシンキの話し言葉が、次第に全国に浸透しつつある。

最近では、フィンランドのことをフィンランド語で「スオミ(Suomi)」と呼ぶということを知っている人が多くなってきたようだが、この語には「フィンランド」の意味のほかに「フィンランド語」の意味もある。ただし、後者の意味のときには suomi のように小文字で書くことになっている。

今日フィンランド全体について用いられる「スオミ」は、本来、ハメ地方、サボ地方、カレリア地方(Karjala)と対立する言葉で、もともとは、今日のフィンランドの南西の端の地域、すなわち、フィンランドの古都トゥルク(Turku, スウェーデン語名 Åbo)を中心とする地方だけを指す名前であった。トゥルクを中心とする地域は、今日の行政区分で Varsinais-Suomi「本来のスオミ」と呼ばれているが、これはその名残である。フィンランド南西部のごく狭い地域に対して用いられた言葉が、フィンランド全域を指す言葉として用いられるようになったのは、スウェーデンとの関わりが深かったフィンランドの政治的・宗教的な中心が、長期にわたり「スオミ地方」の中心トゥルクにおかれていたという歴史的事情のためである。

2 フィンランド語の歴史

フィンランド語の歴史は、文語の成立と発達段階、および、フィンランドを取り巻く政治状況(1809年までスウェーデン領、以後、1917年の独立までロシア領)を基準にして、普通、次のように4つの時期に分けている。

1) 初期フィンランド語 (*varhaisuomi*) 時代 [1540年代以前] フィンランド語の(印刷された)文献が現われる以前の、いわばフィンランド語の先史時代。古文書などに記載されている地名・人名などの固有名詞を除くと、フィンランド語で書かれた文献資料のない時期である。

2) 古フィンランド語 (*vanha suomi*) 時代 [1540年代~1810年頃] 中世のヨーロッパでは、もっぱらラテン語が書き言葉として用いられ、それ以外の大多数の言語は農民の話言葉に過ぎなかった。16世紀初頭に始まった宗教改革をきっかけに、この状況が大きく変わり、ヨーロッパのあちこちで多数の書き言葉が生まれることになる。聖書をはじめとするキリスト教関係の文献を、一般民衆にも理解できるように、それぞれの民族の母語に翻訳することが奨励されたからである。

スウェーデンの勢力下にあつて、それまでは、その活動をもっぱらラテン語とスウェーデン語で行っていたフィンランドの教会も例外ではなく、キリスト教関係の文献が1540年代以降、フィンランド語で次々と現われることになった。

ほぼ3世紀にわたるこの時期のフィンランド語の書き言葉は「古期文語 (*vanha kirjasuomi*)」と総称される。大部分が聖書などのキリスト教関係の文献のフィンランド語訳であるが、中には法律関係の文献の翻訳もある。

フィンランド語の印刷されたテキストとしては、晩年にトゥルクの主教を勤めたアグリコラ (*Mikael Agricola*, 1510?~1557) が著した『ABCの本』 (*ABC-kirja*; 1543年にストックホルムで印刷) が最初のものである。アグリコラの主要な著作は、1544年の『祈祷文集』 (*Rukouskirja Bibliasta*; 875ページ) と1548年の『新約聖書』 (*Se Wsi Testamenti*; 718ページ) の2つの翻訳である。アグリコラの著作で印刷されたものは2,400ページに及ぶが、そのすべてのファクシミリ版が出ているほか、フィンランド内国語研究所 (*Kotimaisten kielten tutkimuskeskus*) にはその電子化されたものがある。

「フィンランド語の書き言葉の父」と呼ばれるように、当時としては並外れたフィンランド語の文才の持ち主であったアグリコラは、一連の翻訳によって、

事実上フィンランド語の文語の基礎をほとんど一人で作ったといっても過言ではない。その際基盤となったのは、トゥルクの周辺地域の方言であるが、アグリコラは他の方言にも通じていたことが、彼の用いた語彙の研究から明らかになっている。また、アグリコラが著作において用いた語彙約6,000語のうち、74%が今日でも使用されていると言われている。

アグリコラが果たせなかった旧約聖書の翻訳が完成し、最初のフィンランド語版聖書が出版されたのは、1642年のことである(『聖書、すなわち聖なる本の全体のフィンランド語訳』 *Biblia, se on: Coko Pyhä Ramattu Suomexi*; 電子化済み)。この聖書訳は、1776年に大幅に改訂を受けたものの、基本的には1930年代の初めに新しい翻訳が出されるまで用いられ、フィンランド語の標準化に大きな役割を果たした。

3) 初期現代フィンランド語 (*varhaisnykysuomi*) 時代 [1810年代~1880年頃] フィンランドがスウェーデン領からロシア領となった(1809)ことにより、スウェーデンでもなく、ロシアでもないフィンランドにアイデンティティーを求めるスウェーデン語系知識人が多数現われる。フィンランド語のルネサンスとも呼べるこの時代は、フィンランドにおける民族意識の高まりという時代風潮の中に位置づけられる。

この時代になると、フィンランド語の文語は聖職者たちの占有物ではなくなり、フィンランド語で文学作品が書かれるようになったり、新聞が発行されるようになる。また、文語としての地位が確立するとともに、フィンランド語が言語学的研究の対象とされるようになった。

フィンランド語の書き言葉の使用が普及してくると、その当時の文語の欠陥が意識されるようになった。当時の文語は、アグリコラ以来の伝統で、西フィンランド諸方言に依拠していたために、台頭してきた東フィンランド諸方言の話手にとって、文法的にも語彙的にも、あまり使い勝手のよいものではなかった。また、これまで主として宗教関係の文献の翻訳において用いられてきたために、表現や構文にスウェーデン語やラテン語の直訳が見られたり、語彙にもこれらの言語からの借用語が非常に多かったから、民族意識の台頭とともに、より純粋で洗練されたフィンランド語の書き言葉を求める動きが活発化するのには、時代の当然の成りゆきであった。

西フィンランド諸方言に依拠したそれまでのフィンランド語文語に対する、東フィンランド諸方言の巻き返しは、「方言間抗争 (*murteiden taistelu*)」と呼ば

れ、1820年代から1850年頃まで、およそ30年間にわたって繰り返されるが、フィンランド語の書き言葉のありかたをめぐって、様々な提案や試みがなされるという、いわば自然発生的な言語改革の時代であった。「方言間抗争」の結果、音韻・形態の面では、引き続き西フィンランド諸方言の特徴を保持しつつ、語彙や表現の面で東フィンランド諸方言の要素が大幅に取り入れられることになり、今日のフィンランド語の標準語の基盤が成立することになった。

方言間抗争の時代に大きな影響力をもった人物として、レンルート(Elias Lönnrot, 1802~1884;「リョンルート」と表記されることもある)の名前を挙げておかなければならない。レンルートは、「フィンランド文学協会(Suomalaisen Kirjallisuuden Seura)」(略称SKS, 1831設立)の奨学金を受けて、カレリアを中心とする地域で口承文学を収集、フィンランド語の最初の文学作品(韻文)『カレワラ』(Vanha Kalevala, 1835; Uusi Kalevala, 1849)として出版した。『カレワラ』の出版は、フィンランドの国民文化の担い手としてのフィンランド語の実力を世界に示すとともに、東フィンランド方言の語彙・表現がフィンランド語の書き言葉に大量に流入し、やがて定着するきっかけとなった。レンルートは、このほかにも大部の『フィンランド語・スウェーデン語辞典』(Suomalais-ruotsalainen sanakirja, 1867-80)を編纂するなど、フィンランド語の標準語の確立に大きな役割を果たした。レンルートのこの辞書は、1961年に『現代フィンランド語辞典』(Nyky-suomen sanakirja)が完成するまで、フィンランド語の辞書として最大のものであった。

フィンランド語の標準語の語彙が豊かになったという観点から、もうひとつ重要なことに、19世紀のこの時代にいわゆる文化語彙が大量に造語されたということがある。この頃に考案された派生語・複合語には、たとえば, ihmiskunta「人類」, kirjakieli「文語」, sanomalahti「新聞」, itsenäinen「独立の」, kirjallisuus「文学」, tasavalta「共和国」, esine「物」, henkilö「人物」, taide「芸術」, tiede「学術」などがあるが、いずれも今日のフィンランド語の語彙の中核をなすものである。

19世紀も半ばを過ぎると、フィンランド語にも散文の文学作品が現われ始める。この意味でのフィンランド語文学の創始者とされるのは、1860年代に短い創作活動を行なったキヴィ(Aleksis Kivi, 1834~1872)である。キヴィの作品としては、『カレワラ』に題材をとった戯曲『クレルヴォ』(Kullervo, 1864)や小説『七人兄弟』(Seitsemän veljestä, 1870)などが有名で、フィンランド語文学の古典とされる。キヴィの全著作も、電子化されている。

4) 現代フィンランド語(nyky-suomi)時代〔1870年代以降〕 1863年、ロシア皇帝アレクサンドル2世によって「言語布告(kieliasetus)」が出され、フィンランド語にスウェーデン語と対等の法律上の地位を与えることが宣言された。以後、フィンランド社会におけるフィンランド語のスウェーデン語に対する相対的地位は徐々に向上し、それとともに、スウェーデン語系とフィンランド語系の国民の間の確執が現われるようになった。

フィンランド語の社会的地位の向上の過程を象徴的に示すのは、大学をはじめとする高等教育のフィンランド語化の進展である。フィンランド語の大学を設立しようとする動きは19世紀の中頃からあったが、その実現はフィンランドが国家として独立するまで待たなければならなかった。独立後間もない1922年、トゥルクに初めてのフィンランド語の大学(Turun Suomalainen Yliopisto)が私立大学として設立された。現在のトゥルク大学の前身である。

フィンランドでは、ロシアの支配下におかれてからも、これまで通りスウェーデン語が公用語として用いられ続けた。1828年にトゥルクからヘルシンキに移転された大学(現在のヘルシンキ大学の前身)も、長い間スウェーデン語の大学であった。次第にフィンランド語系の学生の比率が増加していく一方で、教授陣の大多数がスウェーデン語系のままであったヘルシンキ大学では、独立後、大学の管理運営のフィンランド語化を要求する運動が本格化する。1923年には、学生の母語の比率を考慮しつつ大学内の言語事情を調整することを定めた大学法が制定されるが、多数派を占めるフィンランド語系の学生を満足させるには至らなかった。「言語抗争(kielitaistelu)」と呼ばれるこの対立はその後も続き、「ヘルシンキ大学はフィンランド語で管理運営される大学であるが、教育はフィンランド語とスウェーデン語の二言語併用で行なう」という今日の大原則に落ち着いたのは1937年のことである。

フィンランド語の標準語の発展において特筆すべきことは、フィン・ウゴル比較言語学者として著名なセタラ(Eemil Nestor Setälä, 1864~1935)によって、『フィンランド語構文論』(Suomen kielen lauseoppi, 1880)と『フィンランド語文法』(Suomen kielioppi, 1898)という規範文法が書かれたことである。この2つの文法書は、学校文法として国語教育で使われ、その後何度か細かい改訂が加えられているものの、基本的に今日でも伝統的な標準文法として用いられている。また、『現代フィンランド語辞典』の完成(1961)によって、標準語は語彙の点でも規範が確立したと考えることができる。

3 音と文字

フィンランド語はラテン文字を用いて表記される。普通、英語のアルファベットの26文字に、äとöを加えた28文字をフィンランド語のアルファベット(aakkoset)とする。フィンランド語の正書法は、英語などとは異なり、ほぼ発音通りの表記(正確には「完全に近い音素表記」と言ったほうがいい)と考えてよいので、以下の解説では、原則として音声記号を用いないことにする。

フィンランド語のアルファベットでは、母音字はその名前がそのまま音価を表わし、子音字は、必ずその音価を表わす子音を含む名前を持っている。

《フィンランド語のアルファベットと文字の名前》

A a	[aa]	アー	O o	[oo]	オー
B b	[bee]	ベー	P p	[pee]	ペー
C c	[see]	セー	Q q	[kuu]	クー
D d	[dee]	デー	R r	[är]	アル
E e	[ee]	エー	S s	[äs]	アス
F f	[äf]	アフ	T t	[tee]	テー
G g	[gee]	ゲー	U u	[uu]	ウー
H h	[hoo]	ホー	V v	[vee]	ヴェー
I i	[ii]	イー	W w	[kaksois-vee]	カクソイス・ヴェー
J j	[jii]	イー	X x	[äks]	アクス
K k	[koo]	コー	Y y	[yy]	ユー
L l	[äl]	アル	Z z	[tset]	ツェット
M m	[äm]	アム	Ä ä	[ää]	アー
N n	[än]	アン	Ö ö	[öö]	エー

アルファベットの28文字のうち、c, q, w, x, zは、主として外国の地名・人名などの表記に用いられるのみで、普通は用いられない文字である(ただし、フィンランド語系の人でも、WiikとかFrantziのような姓を持っていることがある)。また、スウェーデン語で用いられるåを「スウェーデン語のo(ruotsalainen o)」と呼んで、アルファベットに加えてzとäの間に置くことがある(åはoと同じ音価になる)。このほか、アルファベットの文字には普通含められないが、英語のshに相当する子音を表わす文字としてšが外来語の表記に用いられることがある。辞書ではšはsと一緒に扱われている。ただし、活字の都合でšの代わりにshまたはsと書かれることも少なくない(例: šekki—shekki, sekki「小切手」)。なお、fとbは、外来語の表記に用いられるだけで、もともとフィ

ンランド語固有の語の表記には用いられない文字だが、最近では外来語が増えて、頻繁に用いられるようになった。

フィンランド語の母音音素は8つで、それぞれの発音は次のような表に整理できる。

	前舌		後舌	
	非円唇	円唇	非円唇	円唇
高	i	y	—	u
中	e	ö	—	o
低	ä	—	a	—

このうち、i, e, o, aは日本語のイ・エ・オ・アで代用して構わない。äは、ドイツ語のä(広いe)よりずっと口の開きが大きく、英語の[æ]に近い母音なので注意すること。yは、フランス語の人称代名詞tu「あなた(2人称単数)」や、ドイツ語のdünn「薄い」の母音とほぼ同じ(唇を丸く突き出してiを発音しようとするとき出る母音)であり、öは、フランス語のfeu「火」seul「ひとりの」、ドイツ語のÖl「油」Köln「ケルン(地名)」の母音の仲間(唇を丸く突き出してeを発音しようとするとき出る母音)である。フィンランド語の母音のうち、日本人がとくに注意しなければならないのはuで、英語のlookの母音と同じく、唇を丸く突き出すようにして発音するように気をつける必要がある。日本人のウは、唇を丸くしないのが標準的な発音である。

子音音素は、音声学的特徴に基づいて次のような表に整理することができる。

	両唇音	唇歯音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音(無声)	p		t		k	
(有声)	b		d		g	
鼻音	m		n		(ŋ)	
摩擦音(無声)		f	s(š)			h
(有声)		v		j		
側面音			l			
ふるえ音			r			

rは、舌尖を強く震わせる、いわゆる「舌尖のふるえ音」で、同じようなrは、ロシア語やスペイン語などにも見られる。š [ʃ]は、フィンランド人にとっては外来音で発音が難しく、実際はsで代用している人が少なくないのでカッコに入れた。フィンランド語の子音の中で唯一独自の文字を持たない[ŋ](日本語の「ガ行鼻濁音」、すなわち、鼻に抜けるガ行の子音に相当)は、単音では子音kの

直前にのみ現われ(例: kenkä [kenkä]「靴」の単数主格), 重音では母音間にもみ現われる(例: kengät [kenˈgät]「靴」の複数主格)。

『ヘルシンギン・サノマット』(「ヘルシンキ新聞」)

4 母音調和

フィンランド語には、1つの語の中に一緒に現われることのできる母音の組み合わせに一定の制約があって、この現象は「母音調和」と呼ばれている。同様の現象は、トルコ語やハンガリー語にも見られる。

フィンランド語の8つの母音は、母音調和の観点から、前母音(ä, ö, y), 後母音(a, o, u), 中立母音(i, e)の3つのグループに分かれる。

前母音	後母音	中立母音
y	u	i
ö	o	e
ä	a	

1つの語の中には、原則として後母音と前母音が混在することができないので、フィンランド語の語は、母音調和の観点から後母音系と前母音系のどちらかに

属することになる。たとえば、

〈後母音系の語〉	〈前母音系の語〉
kulma 「かど」	kylmä 「寒い」
pouta 「渇いた天気」	pöytä 「机, テーブル」

ただし、中立母音は、後母音系の語にも、前母音系の語にも現われることができる。

〈後母音系の語〉	〈前母音系の語〉
pelata 「ゲームをする」	pelätä 「こわがる」
valittaa 「苦情を言う」	välittää 「気にかける」

母音調和があるために、名詞や動詞の語尾などには、後母音系の語につく形と前母音系の語につく形の両方を持つものが多い。これらの語尾は、後母音系の形に a, o, u, 前母音系の形に ä, ö, y を持っている。母音調和をする語尾には、たとえば次のようなものがある。

- 1) 名詞の語尾
 - 内格 (-ssa/-ssä) : talossa 「家」 — levyssä 「レコード」
 - 出格 (-sta/-stä) : talosta — levystä
- 2) 動詞の語尾
 - 3人称複数 (-vat/-vät) : puhuvat 「話す」 — kysyvät 「質問する」
 - 過去分詞 (-nut/-nyt) : puhunut — kysynyt
- 3) 疑問付加詞 (-ko/-kö) : puhutko — kysytkö

《前母音系の語と後母音系の語の活用の例》

	kulma 「かど」		kylmä 「寒い」	
	単数	複数	単数	複数
分格	kulma-a	kulm-i-a	kylmä-ä	kylm-i-ä
様格	kulma-na	kulm-i-na	kylmä-nä	kylm-i-nä
出格	kulma-sta	kulm-i-sta	kylmä-stä	kylm-i-stä
接格	kulma-lla	kulm-i-lla	kylmä-llä	kylm-i-llä
奪格	kulma-lta	kulm-i-lta	kylmä-ltä	kylm-i-ltä

kulma-ssa-ko-han kylmä-ssä-kö-hän
 「隅(単)でかしら」 「寒さ(単)の中でかしら」
 kulm-i-ssa-ko-han kylm-i-ssä-kö-hän
 「隅(複)でかしら」 「寒さ(複)の中でかしら」

5 名詞の活用(格変化)

フィンランド語の名詞は、動詞との関係によって、様々な語尾をとって形を変えるので有名である。名詞がこのように形を変えることを「名詞の活用」ないし「名詞の格変化」と呼び、名詞が活用した一つ一つの形(活用形)を「格」と呼んでいる。たとえば、名詞 *talo* 「家」は次のように格変化する。

	単数	複数	
主格 (nominative)	<i>talo</i>	<i>talo-t</i>	「家(が)」
属格 (genitive)	<i>talo-n</i>	<i>talo-j-en</i>	「家の」
分格 (partitive)	<i>talo-a</i>	<i>talo-j-a</i>	「家(を)」
対格 (accusative)	<i>talo-n</i>	<i>talo-t</i>	「家を」
様格 (essive)	<i>talo-na</i>	<i>talo-i-na</i>	「家として」
変格 (translative)	<i>talo-ksi</i>	<i>talo-i-ksi</i>	「家になる」
内格 (inessive)	<i>talo-ssa</i>	<i>talo-i-ssa</i>	「家の中で」
出格 (elative)	<i>talo-sta</i>	<i>talo-i-sta</i>	「家の中から」
入格 (illative)	<i>talo-on</i>	<i>talo-i-hin</i>	「家の中へ」
接格 (adessive)	<i>talo-lla</i>	<i>talo-i-lla</i>	「家で」
奪格 (ablative)	<i>talo-lta</i>	<i>talo-i-lta</i>	「家から」
向格 (allative)	<i>talo-lle</i>	<i>talo-i-lle</i>	「家へ」
欠格 (abessive)	<i>talo-tta</i>	<i>talo-i-tta</i>	「家なしで」
共格 (comitative)		<i>talo-i-ne</i>	「家とともに」
具格 (instructive)		<i>talo-i-n</i>	「家によって」

14の格のうち、主格・属格・分格・対格の4つは、主として主語または目的語を表わす場合に用いられる形なので、文法格と呼ばれる。また、内格・出格・入格・接格・奪格・向格の6つは、主として場所関係を表わす形なので、場所格と呼ばれる。

格の用法の実際を理解するために、場所格の具体的な用例を見てみよう。フィンランド語の文法書では、6つの格は、その基本的な意味に基づいて、内部格と外部格の2つの系列に分けられて、下のような図式によって整理されている。

すなわち、フィンランド語の場所格は、問題の場所が「ものの内部(～の中)」が問題になっているのか、それとも「ものの表面・近傍(～の上・～に接して)」が問題になっているかの観点から2つのグループに分かれ、一方、その場所と運動との関係(「ものの置かれている場所」「運動の起点」「運動の到達点」)の観点から見ると、3つの対に整理される。

《フィンランド語の場所格の体系》(例: *järv* 「湖」)

	位置格	起点格	目標格
内部格	内格 <i>järve-ssä</i> 《湖水の中で》	出格 <i>järve-stä</i> 《湖水の中から》	入格 <i>järve-en</i> 《湖水の中へ》
外部格	接格 <i>järve-llä</i> 《湖面(湖畔)で》	奪格 <i>järve-ltä</i> 《湖面(湖畔)から》	向格 <i>järve-lle</i> 《湖面(湖畔)へ》

このことを具体例1, 2によって確認してみよう。

- (1) a. *Sinä pane-t omena-n pussi-in.*
2sg.NOM put.2sg apple.ACC bag.ILL
「あなたはリンゴを袋に入れる」
- b. *Omena on nyt pussi-ssa.*
apple.NOM be.3sg now bag.INE
「リンゴは今、袋の中にある」
- c. *Hän otta-a omena-n pussi-sta.*
3sg.NOM take.3sg apple.ACC bag.ELA
「彼女はリンゴを袋から取り出す」
- (2) a. *Minä pane-n kirja-n pöydä-lle.*
1sg.NOM put.1sg book.ACC desk.ALL
「私が本を机の上に置く」
- b. *Kirja on nyt pöydä-llä.*
book.NOM be.3sg now desk.ADE
「本は今、机の上にある」
- c. *Sinä ota-t kirja-n pöydä-ltä.*
2sg.NOM take.2sg book.ACC desk.ABL
「あなたが本を机から(手に)取る」

6 語の構造と語彙の特徴

フィンランド語は膠着性の高い言語である。実際に使われるかどうかは別として、少なくとも理屈の上では、たとえば、3aのような一続きに書かれる長い語(18音節)を作ることができる。もちろんこの「語」は、3bに示すように16の形態素に区切ることができて、意味もなんとか理解可能である。

(3) a. epäjärjestelmällistytämättömyydellänsäkäänköhän

b. epä/järje/st/el/mä/llis/t/yttä/mä/ttöm/yyde/llä/nsä/kään/kö/hän

参考までに、簡単な解説をつければ、この「語」は、名詞 järki「道理」に名詞化・動詞化・形容詞化接尾辞等をつけて作った名詞を格変化させたものに、人称・疑問などを表わす接尾辞をさらにいくつか付加して作られたもので、「(あの人が誰かに命じて)非体系化させなかったことによってもしかしたら」というような意味になる。この語はフィンランド語で最も長い語だという説がある(稲垣美晴『フィンランド語は猫の言葉』文化出版局, 1981)。

3は実際には使われそうにない極端な例だが、実際に使われている複合語の中には、かなり長いものも珍しくない。

(4) a. ylioppilastutkintolautakunta 「大学入学試験委員会」

b. saamelaisvirsi kirjakoitea 「サーミ賛美歌集委員会」

4aは、ylioppilas「大学生」、tutkinto「試験」、lautakunta「委員会」の3つの成分からなる複合語だが、ylioppilasがyli「上の」+oppilas「生徒」、さらにoppilasはoppi-「学ぶ」(動詞語幹)+-las(名詞化・形容詞化接尾辞)、tutkintoがtutki-「調査研究する」(動詞語幹)+-nto(名詞化接尾辞)、lautakuntaがlauta「机」+kunta(人の集団を表わす接尾辞)のように分析できる。

4bは、saamelais-「サーミの」、virsi kirjakoitea「賛美歌集」、komitea「委員会」の3つの成分からなる複合語で、saamelaisはsaame「サーミ、サーミ語」+lais-(名詞化・形容詞化接尾辞)、virsi kirjakoiteaはvirsi「賛美歌」+kirja「本」と分析される。

派生接尾辞が豊富で、5のように、1つの語根を基にした多数の語からなる語群がたくさん見られる(以下の例で、/は形態素の区切りを示す)。

(5) kirja「本」、kirja/sto「図書館」、kirja/lli/nen「書面の」、kirja/lli/s/uus「文献、文学」

kirj/e「手紙」、kirj/e/itse「手紙で」

kirja/in「文字」、kirja/im/isto「アルファベット」、kirja/ime/lli/nen「文面通りの」

kirja/ta「登録する」、kirjaa/ja「登録係(人)」、kirjaa/mo「登録事務所」

kirja/sin「活字」

kirjo/itta/a「書く」、kirjo/itta/ja「著者」、kirjo/itta/minen「書くこと」、kirjo/it/us「作文、文章」、kirjo/it/e「ハードコピー」、kirjo/it/in「プリンター」

kirjo/itta/utu/a「登録のため出頭する」、kirjo/it/utta/a「執筆させる」

kirjo/it/el/la「書く」、kirjo/it/el/ma「作文」

kirja/il/ija「作家」

kirj/el/mä「請願書」

kirj/uri「記録係、書記」

ちなみに、フィンランド語のsaippukauppias「せっけん売り」(saippua「せっけん」+kauppias「商人」)は、世界で一番長い1語の回文(「たけやぶやけた」のように、前後どちらから読んでも同じ言語表現)であるというが、真偽のほどは分からない。

7 類型論的な特徴

世界の言語を文の構造の基本的な特徴によって分類する際に最もよく用いられる観点(類型論的基準)には、基本語順の違い、および、主語・目的語の格表示のしくみの違いがある。

典型的な他動詞文(他動詞を述語とし、主語と目的語を持つ文)の一番自然な語順のことを、その言語の基本語順という。フィンランド語の場合、例文6が示すように、主語(S)+動詞(V)+目的語(O)が他動詞文の普通の語順であり、基本語順はSVOであるといわれる。これに対して、日本語は「主語+目的語+動詞」、すなわちSOVが基本語順ということになる。

(6) a. Pekka osta-a kirja-n. [対格目的語]
Pekka.NOM buy.3sg book.ACC
「ペッカは本を買う」

b. Pekka rakasta-a Liisa-a. [分格目的語]
Pekka.NOM love.3sg Liisa.PAR
「ペッカはリーサを愛している」

なお、例文7が示すように、自動詞文の副詞的成分も、動詞に対して目的語と同じ相対的位置に現われることが多い。

(7) a. Pekka lähte-e kaupunki-in.
Pekka.NOM leave.3sg town.ILL
「ペッカは町に出かける」

b. Pekka tule-e huomenna.
Pekka.NOM come.3sg tomorrow
「ペッカは明日やってくる」

基本語順以外の語順の特徴として、日本語と同じように、名詞の属格形や形容詞修飾語が常に被修飾名詞の前に現われるという特徴がある。

- (8) a. Suome-n historia [属格修飾語]
 Finland.GEN history.NOM 「フィンランドの歴史」
 b. suomalainen sauna [形容詞修飾語]
 Finnish.NOM sauna.NOM 「フィンランド・サウナ」

フィンランド語では、日本語の助詞と同じように名詞の後ろに現われる後置詞 (postposition) がたくさんある。他方、純粋に前置詞と見なすべき語はほとんどないが、後置詞としても前置詞としても用いられる語や、通常は前置詞として用いられる語がかなり見られる。

- (9) a. talo-n takana / edessä [後置詞]
 house.GEN behind / in front of 「家の裏に/前に」
 b. lähellä kirkko-a ~ kirko-n lähellä [前置詞・後置詞]
 near church.PAR church.GEN near 「教会の近くで」
 c. ennen kolme-a [前置詞]
 before three.PAR 「3時前に」

ある言語において、文の中で主語と目的語がどのような形態的特徴によって明示されるかを、その言語における主語と目的語の格表示という。

たとえば、日本語では、他動詞文・自動詞文に関係なく、主語をガ格で表示し、他動詞文の目的語はヲ格で表示する。世界の多くの言語は、日本語と同様に、自動詞文の主語と他動詞文の主語を同じに扱い、他動詞文の目的語とはっきり区別する。このような言語は、普通、目的語を特別な形(しばしば「対格」と呼ばれる)で表示して、名詞の最も中立的な形(しばしば「主格」と呼ばれる)で表示される主語に対立させるので、目的語を表わす形の最も普通の名称「対格」に注目して、「対格型の格表示」を持つ言語と呼ばれる。

フィンランド語は、例文 6, 7 で明らかなように、自動詞文・他動詞文の主語を主格で表わし、他動詞文の目的語を対格または分格で表わすので、対格型の格表示を持つ言語であることになる。

対格型格表示と対立する格表示は、「能格型の格表示」と呼ばれる。能格型の格表示を持つ言語の文では、他動詞の主語を特別な形(しばしば「能格 (ergative)」と呼ばれる)で表わし、名詞の最も中立的な形(しばしば「絶対格 (absolutive)」と呼ばれる)で表わされる自動詞の主語と他動詞の目的語に対立させる。主語・目的語の格表示の問題、とくに対格型の格表示を持つ言語については、言語学

の入門書(たとえば、風間喜代三ほか『言語学』東京大学出版会、1993)の言語類型論の章を参照されたい。

このように、フィンランド語の基本的な類型論的特徴をまとめると、基本語順が SVO で、名詞の属格および形容詞が被修飾名詞に先行し、後置詞が主体で、対格型の格表示を持つ言語であるということになる。

8 文の構造の特色

フィンランド語は、基本語順が SVO であるという点で、英語と同じ特徴を持つが、文の構造をもう少し詳しく見てみると、フィンランド語の文の語順は、英語の文の語順とはかなり異なることが明らかになる。

まず、フィンランド語には、主語に相当する文の成分が主格で現われない構文がある。この構文ではとくに、例文 10 のような属格主語構文に注目しておこう。

- (10) a. Peka-n täyty-y lähte-ä.
 Pekka.GEN must.3sg leave.INF
 「ペッカは出なければならぬ」
 b. Peka-n on hauska lähte-ä.
 Pekka.GEN be.3sg fun.NOM leave.INF
 「ペッカは出かけるのが楽しい」

また、主語がない文が頻繁に現われる。これらの文は主語が省略されているというのではなく、英語の「仮主語」の it に相当する語がフィンランド語では用いられないための現象である。とくに 12 の構文では、意味の上では主語と考えられる名詞が文法的には目的語として現われることに注意しよう。

- (11) Sata-a kovasti.
 rain.3sg hard
 「(雨が) 激しく降っている」
 (12) a. Pekka-a väsyttä-ä.
 Pekka.PAR tire.3sg
 「ペッカは疲れている」
 b. Pekka-a nauratta-a.
 Pekka.PAR make laugh.3sg
 「ペッカは可笑しい (=笑いたい)」

文法的に主語があるにもかかわらず、普通、主語以外の名詞句が文頭に現われる構文がたくさんある。

- (13) a. Liisa-lla on lapsi.
Liisa.ADE be.3sg child.NOM
「リーサには子供がいる」
- b. Liisa-lle synty-i lapsi.
Liisa.ALL be born.PAST.3sg child.NOM
「リーサに子供が生まれた」
- c. Liisa-lta kuol-i lapsi.
Liisa.ABL die.PAST.3sg child.NOM
「リーサは子供が死んだ」

フィンランド語には日本語の「その本は太郎によって書かれた」や、英語の The book was written by John. のような受身構文がなく、普通、その代わりにするのは、「目的語＋動詞＋主語」という語順の文である。

- (14) Ohjelma-n on toimitta-nut Pekka Joki.
program.ACC be.3sg edit.NUT Pekka Joki.NOM
「番組はペッカ・ヨキによって製作された」

主語が一般的で明示されない(できない)一般人称文・不定人称文が頻繁に用いられる。前者は15のように3人称単数形で表わされるが、後者には16のように動詞の特別な形式があり、フィンランド語の際だった特徴となっている。不定人称文は、文法書では「受動文」と呼ばれるのが普通だが、英語などの受動文とはだいぶ違うので、混同しない方がよい。16は、受動文として翻訳しているが、実際には「彼」が目的語の形(対格)で現われていることに注意されたい。

- (15) Pekka-an voi luotta-a. (一般人称)
Pekka.ILL can.3sg trust.INF
「ペッカは信頼できる」
- (16) Häne-t kutsu-taan päivällise-lle. (不定人称)
3sg.ACC call.INDEF dinner.ALL
「彼がディナーに招待される(=人が彼を招待する)」



知って得する フィンランド語情報



1) 人の名前

フィンランド人の人名は、ヨーロッパの慣習に従って、Mikko Korhonen ミッコ・コルホネンのように「名前＋姓」の順番にするのが正式である。日常生活での呼称として、名前(ファーストネーム)を用いるのもヨーロッパの習慣である。以前、フィンランドの国会議員団の通訳をしたことがあったが、国会議長も含め団員たちが全員、お互いをファーストネームで呼び合い、しかも、議員団に加わっていない他の議員のうわさをするときにも同じようにしていたのが、印象に残っている。

面白いことに、名前は単独に用いられるとちゃんと格変化するのに、「名前＋姓」を格変化させると、Mikko Korhosen ミッコ・コルホセン(属格)、Mikko Korhoselle ミッコ・コルホセレ(向格)のように、名前の部分是不変化となり、姓の部分しか格変化しない。これは、称号のときも同じで、professori Korhonen「コルホネン教授」を格変化させると、professori Korhosen(属格)、professori Korhoselle(向格)などとなる。

また、話し言葉では、Korhosen Mikko のように、姓を属格にして名前の前に置く言い方がなされることがあり、もともと「姓＋名前」という語順を持っていた名残だろうと言われることもあるが、本当のところは分からない。

2) 挨拶の言葉

Hyvää huomenta! ヒュヴァー フオメンタ 「おはよう(よい朝を!)」
Hyvää päivää! ヒュヴァー バイヴァー 「こんにちは(よい日を!)」
Hyvää iltaa! ヒュヴァー イルター 「こんばんは(よい夕べを!)」
普通は Hyvää を省略して、Huomenta! Päivää! Iltaa! と言うことが多い。
もう少し少しかけた挨拶には、Terve! テルヴェ Hei! ヘイ Moi! モイ などがある。朝・昼・晩いつでも使える。Terve! は、「健康な」という意味の形容詞で、普通は親しい間柄の相手に対して用いる。

Hei! はスウェーデン語から入ったものらしいが、かなり軽い挨拶で、たとえば、ヘルシンキのスーパーで会計をする際、自分の番が回ってきたときにレジ係の若い女性と交わす挨拶は、間違いなく Hei! である。Päivää! だと改まりすぎるし、Terve! は知り合いでないときちょっと抵抗がある。

Moi! は、スウェーデン語の God morgon! のなまったものだという説があり、これも若者言葉と思われるが、私の親しい友人たちの中には今でも私に Moi! と挨拶する人がいるので、私も Moi! を使い続けている。

3) 数 詞

1	yksi	ユクシ	11	yksitoista	ユクシトイスタ
2	kaksi	カクシ	12	kaksitoista	カクシトイスタ
3	kolme	コルメ	13	kolmetoista	コルメトイスタ
4	neljä	ネリヤ	14	neljätoista	ネリヤトイスタ
5	viisi	ヴィーシ	15	viisitoista	ヴィーシトイスタ
6	kuusi	クーシ	16	kuusitoista	クーシトイスタ
7	seitsemän	セイツェマン	17	seitsemäntoista	セイツェマントイスタ
8	kahdeksan	カハデクサン	18	kahdeksantoista	カハデクサントイスタ
9	yhdeksän	ユフデクサン	19	yhdeksäntoista	ユフデクサントイスタ
10	kymmenen	キユンメネン			
20	kaksikymmentä	カクシキュメンタ			
30	kolmekymmentä	コルメキュメンタ			
40	neljäkymmentä	ネリヤキュメンタ			
50	viisikymmentä	ヴィーシキュメンタ			
60	kuusikymmentä	クーシキュメンタ			
70	seitsemänkymmentä	セイツェマンキュメンタ			
80	kahdeksänkymmentä	カハデクサンキュメンタ			
90	yhdeksänkymmentä	ユフデクサンキュメンタ			
23	kaksikymmentäkolme	カクシキュメンタコルメ			
58	viisikymmentäkahdeksan	ヴィーシキュメンタカハデクサン			
91	yhdeksänkymmentäyksi	ユフデクサンキュメンタユクシ			
100	sata	サタ			
0	nolla	ノッラ			

9 参考図書

1) 参考書 フィンランド語の構造を概観したもので、比較的最近のものを2つ挙げる。

- (1) Michael Branch (1987), "Finnish", in Bernard Comrie (ed.), *The World's Major Languages* (Croom Helm)

- (2) 松村一登 (1992), 「フィンランド語」『世界言語編(下-1)』(言語学大辞典 第3巻, 三省堂)

2) 入門書・文法書 入門書はいろいろなものが出ているので、手ごろと思われるものだけを挙げる。まず、日本語で書かれた実用的な入門書では3が一番やさしいと思われる。ただし、フィンランド語の文法の全部をカバーしてはいないので、すぐに物足りなくなるであろう。4はフィンランド語の文法の基礎的な部分をほぼカバーしていて、文法書として使うことができるが、独習者には解説がやや難しいかもしれない。どちらも付属のカセットが別売されている。

- (3) 松村一登 (1986), 『エクスプレス フィンランド語』(白水社)

- (4) 荻島崇 (1992), 『基礎フィンランド語文法』(大学書林)

英語で書かれた入門書では、東京の洋書専門店できどき見かける Teach Yourself シリーズの5が一番手に入りやすいのではないと思われるが、フィンランドの出版社の6も、何度も版を重ねているロングセラーで捨てがたい。前者は入門だけだが、後者は続編の第2巻になると本格的になる。5, 6ともに、付属のカセットが出ている。

- (5) Terttu Leney (1993), *Finnish* (Hodder & Stoughton)

- (6) Maija-Hellikki Aaltio (1984), *Finnish for Foreigners I* (Otava)

言語学的にきちんと勉強しようとする人には、体系的な文法解説のある本格的な学習書7を大学の図書館などで探すことをお勧めする。

- (7) Meri Lehtinen (1970³), *Basic Course in Finnish* (Uralic and Altaic Series 27, Indiana University)

7で勉強すれば、普通はとくに文法書を購入する必要はないと思われるが、どうしても文法書と名のついたものを手もとに置きたいという人もいるであろう。8はもともとフィンランド語学習者向けに書かれた文法書の英語版で、初学者にも分かりやすく書かれている。9は言語学者を対象とする専門的な記述文法で、言語学の知識のない学習者には使いにくいであろう。

- (8) Fred Karlsson (1983), *Finnish Grammar* (WSOY)

- (9) Helena Sulkala & Merja Karjalainen (1992), *Finnish* (Routledge)

3) 辞 書

辞書は、近年優れたものがたくさん出版されている。まず、学習者が最初に手にすると思われる英語との対訳辞典だが、東京の大きな洋書取扱店でよく見か

けるのは10である。これはポケット辞典なので携帯に便利ではあるが、フィンランド語を本格的に勉強しようという人は、すぐに物足りなく感じるようになる。11は、最近出たコンパクトな辞典で、フィン・英辞典と英・フィン辞典がセットになっている。

(10) Aino Wuolle (1973), *Suomalais-englantilainen opiskelusanakirja* (『フィン・英学習辞典』), 492pp. (WSOY)

(11) Sini Sovijärvi (1995), *Suomi-englanti-suomi-taskusanakirja* (『フィン・英・フィン ポケット辞典』), 794pp. (WSOY)

フィンランド語を本格的に勉強しようという人は、なるべく早い機会にもっと大きい辞典を買った方がよい。持ち運びできる大きさの中辞典としては12をお薦めする。机上版の英語との対訳辞書としては13が最も大きい。

(12) Raija Hurme, Riita-Leena Malin & Olli Syväoja (1987), *Suomi-englanti käsisanakirja* (『フィン・英中辞典』), 793 pp. (WSOY)

(13) ——— (1984), *Uusi suomi-englanti suursanakirja* (『新フィン・英大辞典』), 1446 pp. (WSOY)

上級の学習者のために、フィンランド語の国語辞典についてやや詳しく触れておこう。フィンランド語の国語辞典は、次の3つである。

(14) *Nykysuomen sanakirja* (『現代フィンランド語辞典』) (WSOY, 初版 1951-61)

(15) *Suomen kielen perussanakirja* (『フィンランド語基礎辞典』) (Valtion painatuskeskus, 1990-1994)

(16) *Suomen kielen sanakirja* (『フィンランド語辞典』) (Gummerus, 1993)

14は、フィンランド語の辞書としては最大のもの(見出し語約20万語、約4,500ページ)で、何度か普及版が出されている。本文は初版(全6巻)以来変わっていないが、普及版は縮刷になって3巻になったほか、最後の巻の巻末に新語などを収録した補遺がついている。

『現代フィンランド語辞典』は、1938年までに収集された用例に基づいて編集された辞典であり、すでに出版された時点から「内容が古くなっている」という声があった。それに応える形で編集されたのが、15の3巻本の『フィンランド語基礎辞典』である。この辞典は、見出し語数、ページ数ともに、『現代フィンランド語辞典』の半分くらいの規模(見出し語約10万語、約2,000ページ)の辞書で、親辞典から古語などを省いて、新語を加えている。見出し語10万のう

ちの約2割が『現代フィンランド語辞典』に載っていない新語であるといわれ、この半世紀間のフィンランド語の語彙の変遷の激しさがうかがわれる。1997年に出た『基礎辞典』のCD-ROM版(19)には、印刷版と比べると2,000語も新語が多く収録されているというから、最近のフィンランド語の語彙の変化は本当に目まぐるしいようだ。

『現代フィンランド語辞典』と『フィンランド語基礎辞典』が国立の研究所の大規模なプロジェクトの産物とすれば、出版社の企画として出された16の『フィンランド語辞典』(863ページ、見出し語約45,000語)は、1巻本のフィンランド語国語辞典として唯一のものである。初めB5判の机上版だったのが、いつのまにか中辞典サイズの縮刷版になってしまった。文字が小さくて中年以上の年代の人には使いにくいかもしれないが、見出し語の解説が要領を得ていて、また、小項目の見出し以外にはちゃんと用例も添えられているので、手軽に使える辞書として、筆者はずいぶんと重宝している。

最近、フィンランド語の辞書も電子版が出るようになって、CD-ROM(PC/Windows用)で出ている辞書が少なくとも3つある。

(17) 『12か国語大辞典』(三修社, 1996)

(18) *Elektronist sanakirjat. Suomi-englanti-suomi sanakirja* (『電子版フィン・英・フィン辞典』) (WSOY, 1996)

(19) *CD-Perussanakirja* (『CD-ROM版基礎辞典』) (Edita, 1997)

日本に出ているものは、17に含まれているフィン・英、英・フィン辞書であるが、単語レベルの対訳辞書なので、本格的な辞書を期待しないほうがよい。この電子辞書は10をもとにして作られたようである。18は、17よりやや辞書らしくなっているが、インストールの画面がフィンランド語なので、初学者は戸惑うかもしれない。ただ、辞書データをそっくりハードディスクに移すオプションがあるので、使い方によっては非常に便利である。19は、上述の『フィンランド語基礎辞典』のCD-ROM版だが、印刷版の改訂版にもなっている。

フィンランド語の辞書については、しばらく前に書いたエッセイがある。一部情報がやや古くなってしまった箇所もあるが、ここよりやや詳しい話が載っているので、併せて読んでいただきたい。

松村一登(1992), 『フィンランド語の辞書』『世界の辞書』(竹林滋・千野栄一・東信行編, 研究社)